4.5　児童生徒の実態把握と課題の焦点化，授業改善のためのICF及びICF-CYの活用

秋田県立勝平養護学校　教諭　二階堂　悟

1　ICF及びICF-CYを活用するに至った背景と目的

特別支援学校（肢体不自由）である秋田県立勝平養護学校(以下，本校）は，教育課程を類型化し，短期入院児童生徒への教育とあわせて児童生徒の障害の重度・重複化や多様化，またそれに伴う個々のニーズの多様化に応じた教育活動を行っています。児童生徒の約８割は，隣接する秋田県立太平療育園（肢体不自由児施設の機能を有する病院）に入園し，治療やリハビリテーションを受けています。

本校では，児童生徒が家庭・学校・施設・社会での生活に希望をもち，自分の力を発揮しながら主体的に活動に参加していくことを「豊かな生活」として捉え，教育活動を進めてきました。そのためには，本人や保護者の願いを受けとめ，関係機関との連携のもとで児童生徒の具体的な教育課題を焦点化し，取りまく環境を整えながら個々のニーズに応じた適切な指導と支援を行うことが必要であると考えました。そこで，個別の指導計画の充実に向けた取り組みを行いましたが，個別の指導計画に設定した目標等が児童生徒の生活の中にどのように位置づけられているのかという疑念が生まれるようになってきました。

このような状況を踏まえ，「個別の教育支援計画」の支援目標・内容を，個々の教育プログラムである「個別の指導計画」に反映していくために，児童生徒の実態を総合的・多面的に理解できるICF及びICF-CY（以下，ICF/ICF-CY）を活用し，一人一人の教育課題を焦点化し，そこで得られた具体的な課題や支援に基づいた授業実践の取り組みを行うことにしました。併せて児童生徒一人一人の成長を願い，関係機関とともに協力して指導を行っていくためにICF/ICF-CYの連携ツールとしての活用も考えることにしました。

2　ICF/ICF-CY活用の実際

ここでは，本校での以下の三つの取り組みを紹介します。

(1) ICF関連図作成を通した課題の焦点化と個別の指導計画作り

本校では，課題を「児童生徒に現在あらわれているところの，将来の豊かな生活に結びつき，何らかの支援によって伸びることが期待される力についての課題。」と捉え，ICF/ICF-CY活用による焦点化させる取り組みを行いました。その主な目的は次の3点です。①ICFチェックリストでの評価やICF関連図の作成を通して，児童生徒の生活の全体像を知る。②生活の全体像から現在取り組むべき課題を見いだし，学校教育の場においてより個々の実態に応じた指導場面や指導方法を工夫する。③児童生徒をとりまく関係者が課題を共有し，それぞれの立場で共に児童生徒を育む。

そこで，児童生徒の個別の教育支援計画での支援目標・内容から課題を焦点化し，個別の指導

計画に反映させていくために，次の手順で取り組みました。① ICF チェックリストを用いた実態把握や本人・保護者の願い，教師間の話し合いを踏まえた個別の教育支援計画の検討と「豊かな生活」における「参加」の姿をもとにした課題の明確化，② ICF チェックリストでの評価・ICF 関連図作成を通した児童生徒の全体像の理解と課題の焦点化，③焦点化された課題をもとにした個別の指導計画の作成。

本校では，「豊かな生活」に向けた問題解決の方針の確立を目指し，現状把握と目標設定のために ICF 関連図の活用を進めることとし，見落としなく全体像をつかむ，解決のための手がかりを探し出す，プラスの要素をたくさん見つける，というように ICF 活用の基本的な姿勢を再確認しました。

（2）授業への活用と授業改善の取り組み

焦点化された課題を分析して指導課題の「系統性（シークエンス）と範囲（スコープ）」を考え，指導内容・場面を設定するとともに，児童生徒の主体的に取り組む姿を目指し，個々の「活動」と「参加」を促す教育活動全体における「共通支援」を考えながら授業づくりを進めました。具体的には次の事例の通りです。

図１　中学部３年男子生徒（Ⅲ類型）ICF 関連図

図１は，活動と参加の状況に注目し，課題を焦点化できるように具体的な場面や様子を文章で記述した中学部３年Ｆ男のＩＣＦ関連図です。この関連図の下線部分の記述を基に本生徒の目指す豊かな生活を「慣れた人や好きな物・場所を手がかりにしたかかわりによって，伝わることへの喜びや自信がもてるようになり，落ち着いた気持ちで過ごすことができる。」とし，個別の教育支援計画の支援目標に照らし，焦点化された課題を次のように設定しました。「物を操作する活動や身振りによるコミュニケーションの経験を重ね，自主的に手を使ったり，身振りによる要求をしたりすることができる。」この焦点化された課題を受けて，図２のとおり個別の指導計画のなかに目標を設定しました。

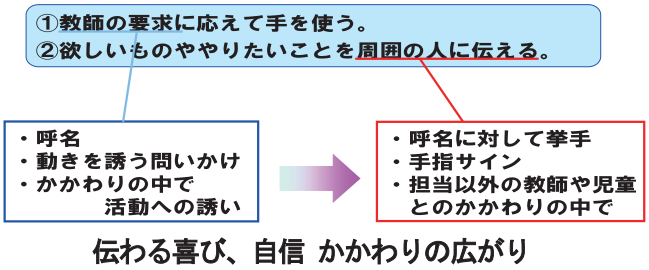

図２　個別の指導計画の目標の設定

この個別の指導計画の目標達成に向けて読み聞かせの学習場面に図３の指導課題による活動の設定と図４の共通支援による活動の設定を行い，授業づくり行いました。

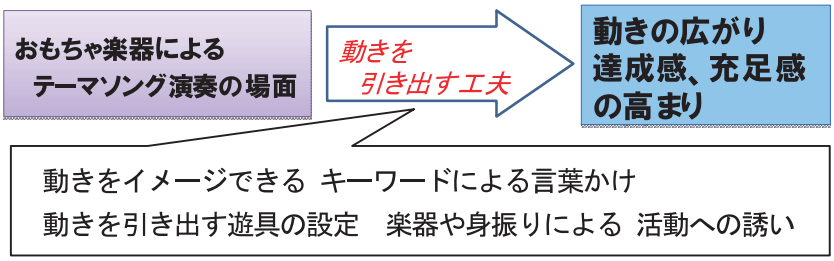

図３　指導課題による活動の設定

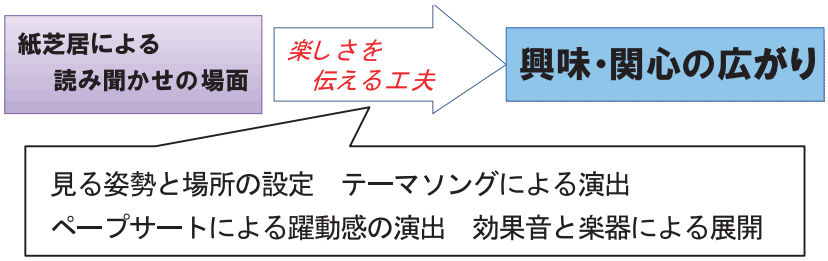

図４　共通支援による活動の設定

さらに，日々の指導の評価を繰り返すことで個別の指導目標が最適化されるのではないかと考え，指導記録による授業づくりに取り組みました。これは，授業づくりシート（指導記録）により日々の授業を評価し，授業のねらいと場面設定，手だてを見直しながら，教師の願いや意図を授業に反映させて指導場面での支援を整理し，授業を構成するというものです。

また，授業研究会では授業参観者の気づきを付箋紙に自由記述し，グループ化・構造化することで，授業や児童生徒の活動と参加の様子について授業の改善のポイントを整理しました。さらに，学部による教師間の話し合いの中で，ICF チェックリストや ICF 関連図での変容から指導内容・支援の整合性を評価することを通して授業改善を行ってきました。

（３）他職種との情報の共有

それぞれの学部で ICF 関連図を活用した「児童生徒を語る会」を行うとともに，太平療育園とのケース会議及びリハビリテーション参観時にも ICF 関連図を用いて情報の共有を図ってきました。

３　成果と今後の展望

（１）成果

①　ICF チェックリストでの評価，ICF 関連図作成を通した児童生徒の生活の全体像の把握

担任一人ではなく複数の教師による ICF チェックリストでの評価や ICF 関連図作成を行った結果，児童生徒の全体像を把握した上で，課題の焦点化ができ，教育支援計画の支援目標や個別の指導計画の目標の見直しと授業改善につながりました。また，一人一人の「豊かな生活」の検討の際には，「活動」と「参加」の促進という視点で課題や支援の仕方を考えるようになり，課題の背景の確認とともに，具体的な授業の目標への活かし方を検討することにつながりました。

②　児童生徒の全体像から「良さ」や「主体性」に視点を当てる指導と支援

一連の取り組みを通して課題の背景について教師間で確認するとともに，そのために必要な支援について明確にすることができました。また，全体像の把握の中から見えてきた児童生徒の「良さ」を指導に生かすことで，今できることに取り組む前向きな気持ちや姿勢から，主体的に学ぶ意欲を育てる方向で授業を進めることができました。児童生徒の主体的に取り組む姿や周囲の人と共に取り組む姿をとらえて指導に取り入れることで，さらに児童生徒のもつ可能性を広げるかかわりや指導と支援を行うことが可能となりました。

③　関係者による課題の共有による，共に児童生徒を育もうとする気運の高まり

「活動」や，「参加」としての「豊かな生活」を軸に児童生徒の課題の背景について関係者間で確認し，焦点化された課題を具体的にどの授業形態でどのような内容で取り上げていくのかを関係教師間で話し合いました。焦点化された課題について実際に指導していく際には，「系統性と範囲」と「共通支援」を教師間で話し合い，課題の分析や場面構成の検討を行うとともに，それぞれの方向性について話し合う必要がありました。そのことを通して，児童生徒を共に育もうとする気運が高まり，授業場面での教師の具体的な指導内容やかかわりに変化が見られるようになってきました。

（２）課題

①　関係機関との連携

太平療育園との連携を深めていくことと個別の指導計画等への組み入れを目指していくために，医療と教育をつなぐ ICF 関連図の活用が課題であり，また，チェックリストの項目の検討，ICF 関連図作成手順の簡易化，作成時期の見直し，記載内容の簡素化等の検討が必要になってきました。

②　本人及び保護者の参画

児童生徒の自己理解を深め，個々のニーズにより合った支援を行っていくために，可能な範囲で本人や保護者が参画する，或いは本人の意思をできるだけ反映した ICF 関連図を作成することが必要であると考えます。児童生徒一人一人の願いや考えが反映されるために，児童生徒の姿に寄り添う受容的なかかわりを心がけることとともに，併せて本人の意思をできるだけ反映させるための具体的な手だてについても検討していく必要性を感じています。

（3）今後の展望

私たち教師が児童生徒の周囲に目を向け，周囲に認められる状況づくりを考えていくこと，すなわち活動の促進と環境整備は，その子のもつ力とやる気を引き出し，毎日の学習を楽しいものへと変えていくことにつながりました。その結果，学習への自信は日々の生活に生き生きと取り組む姿，また生き生きと社会に参加する姿となって現れてきています。

本校における ICF/ICF-CY による「課題の焦点化」と「系統性と範囲」,「共通支援」の取り組みは，このように学習場面における目標の適正化と支援の適正化ということができます。

今後も，児童生徒の「豊かな生活」づくりを支えていくために，①児童生徒の全体像と課題の背景を探り，課題の焦点化を行うことができる ICF 関連図の活用を行うこと，②全体像の把握の中から見える児童生徒の「良さ」や「主体性」等の把握とそれらを生かした指導と支援について検討すること，そして，③本人を中心にして関係者間で児童生徒の情報を共有し，「豊かな生活」づくりに向けたそれぞれの方針や具体的な関わりの方法・内容等の検討を共に行うことが重要であると感じています。